



2018年1月 第16巻第1号

かく語りき—聖人の言葉

「真実を語るということは、細かいところまで注意しなければならない。真理によって、人は神を悟ることができる」

…シュリー・ラーマクリシュナ

「長い間隠しておけないものが3つある。太陽、月、真理だ」

…釈迦

今月の目次

- かく語りき—聖人の言葉
- 2018年2月の予定
- 2017年12月の逗子例会
第166回ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィー生誕祝賀会を開催
- 2017年クリスマス・イブ礼拝
- 山形サットサンガ
- 仙台サットサンガ
- 南インド巡礼の旅報告（後半）
（田辺美和子さんのレポートの要約）

- 忘れられない物語
- 今月の思想

今月の予定

2018年2月の予定

- 2018年2月の生誕日

シュリー・ラーマクリシュナ

2月17日（土）

スワミー・ヨーガーナンダ

3月5日（月）

ラーマナヴァミ 3月25日（日）

2月の協会の行事

2月3日（土） 10:00～12:00

東京・インド大使館例会

講義：『バガヴァッド・ギーター』

場所：インド大使館 03-3262-2391

お問い合わせ

<http://www.gita-embassy.com/>お問い合わせ/

※入館・受講するには、大使館発行のIDカードが必要です。詳細は、協会ウェブサイトのページ左側にあるメニュー

一から「インド大使館 ID」をご覧ください。

※免許証など写真つきの身分証を必ずお持ちください。

2月6日（火） 14:00～15:30

火曜勉強会（賛歌と『ラーマクリシュナの福音』の勉強会）

場所：逗子本部本館

お申し込み・お問い合わせ
benkyo.nvk@gmail.com

詳細は、協会ウェブサイトの「Home」の一番下の方をご覧ください。

※どなたでも参加できますが、前日までに上記の宛先にメールで予約が必要です。

また、当日キャンセルになることもありますので、当日朝に協会ウェブサイトで必ずご確認ください。

2月17日（土） 10:00～12:00

『ウパニシャド』 スタディークラス
講義：ウパニシャド

場所：インド大使館 03-3262-2391

お問い合わせ：

<http://www.gita-embassy.com/>お問合せ/

※入館・受講するには、大使館発行のIDカードが必要です。詳細は、協会ウェブサイトのページ左側にあるメニューから「インド大使館 ID」をご覧ください。

※免許証など写真つきの身分証を必ずお持ちください。

※事前テキストを、協会ウェブサイトの「テキストギャラリー」－「ウパニシャド」からダウンロードして（必要に応じて印刷）、当日お持ちください。

2月18日（日） 10:30～16:30

逗子例会

場所：逗子本部本館

お問い合わせ：逗子協会 046-873-0428

2月23日（金）

ホームレス・ナラ・ナーラーヤナへの奉仕活動

現地でのお食事配布など。

お問い合わせ：佐藤 090-6544-9304

2月 毎土曜日 10:15～11:45

ハタ・ヨーガ・クラス

場所：逗子本部別館

お問い合わせ：羽成淳（はなり すなお）

080-6702-2308

体験レッスンもできます。

予定は変更されることもありますので、日程は直接お問い合わせください。

専用ウェブサイトをご覧ください。

<http://zushi-hatayoga.jimdo.com/>

2017年12月の逗子例会

第166回ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィー生誕祝賀会を開催

12月17日（日）、日本ヴェーダークタ協会の12月の逗子例会で第166回ホ

ーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィー生誕祝賀会が執り行われ、約40名が参加しました。

午前6時、逗子本部本館のシュラインでマンガラ・アーラティ（朝拝）が行われ、祝賀会の用意のお手伝いのために前泊した方や早朝に参集した方が参加しました。

早めの朝食の後、ボランティアはいくつかのグループに分かれてそれぞれの持ち場に到着し、祝賀会の準備を着々と進めていきました。本館では、祭壇に供える食物と花の供物が用意されました。別館では、プージャー（礼拝）の儀式台が祭壇の隣に設置され、この儀式台と祭壇がよく見えるように1階の床に折りたたみ式のイスが並べられました。また、マイクやビデオカメラなどのAV機器がセッティングされ、プージャー用の金属製の道具が一つひとつ磨き上げられ、プシュパンジャリ（花の奉獻）で捧げる花のつぼみと葉がトレイに並べられました。



午前のプログラムの開始時刻が近づくと、スワミー・メーダサーナンダジー（マハーラージ）は、祭壇に並べられた供物の皿と飾り付けの生花のレイアウトや、ホーリー・マザー、シュリー・ラーマクリシュナ、スワミー・ヴィヴェーカーナンダの御写真に掛けられたガーランド（花輪）のバランスを確認して少し調整を加えると、祭壇に向かって頂礼しました。そして、マハーラージの合図で法螺（ほら）貝の音が3度響き渡り、プージャーの始まりが告げられました。マハーラージは儀式台の上に座り、特別なマントラを唱えながら約50分間儀式を執り行いました。台上での儀式が終わると、マハーラージは台から降りて祭壇のマザーの御写真に頂礼しプージャーの花を捧げました。



続いて祭壇の前でアーラティが行われました。法螺貝とシンバルが鳴り響く中、シャンティ泉田さんのシンセサイザー伴奏に合わせて参加者一同が「カーンダナ・バーヴァ・バーンダナ」を歌い、マハーラージはベルを鳴らしながら地球の5大構成要素（エーテル・空気・火・水・土）を象徴する祭具（炎・

牡牛の尾でできた扇・織物など）を奉獻しました。アーラティが終わると、祭壇の供物の皿が次々に下げられて数人のリレーで本館の台所に運ばれ、昼食のプラサード（お下がり）の配膳の準備が始まりました。別館では、2曲目の賛歌「サルヴァ・マンガラー・マンガレー」をマハーラージと参加者で斉唱しました。

次に、マハーラージは全員に起立を促すと、参加者の間を縫って歩き皆の頭にガンジス川の聖水をふりかけました。そして、プシュパンジャリ用の花のつぼみと葉が全員に配られると、参加者は祭壇の近くに寄り、マハーラージの先導でホーリー・マザーに捧げるプシュパンジャリのマントラを唱えました。その後、数人ずつ祭壇に花を奉獻し礼拝しました。これで午前のプログラムが終了し、皆本館に移動して昼食をいただきました。

午後のプログラムは 2 時半頃始まりました。マントラ（真言）を詠唱した後、『靈性の師たちの生涯』からホーリー・マザーの言葉を参加者が一人一つずつ読み上げ、特に重要な言葉についてマハーラージがコメントしました。日本語のサポートは佐々木陽子さんでした。次に、日本語の賛歌数曲を佐藤洋子さん、新田ゆう子さん、隅埜由美さん、平石知子さん、鈴木啓子さんが歌い、シャンティ泉田さんがシンセサ

イザーで伴奏しました。また、マハーラージも賛歌を独唱しました。その後、マントラ詠唱、数分間の瞑想を行った後、本館に移動して茶菓をいただきました。



今回も多数のボランティアの方々にお手伝いいただきました。皆様のサポートに心より感謝を申し上げます。

2017年クリスマス・イブ礼拝

2017年12月24日、日本ヴェーダーンタ協会では毎年恒例のクリスマス・イブ礼拝を逗子本部別館にて行いました。



午後7時にプログラム開始。初めにマハーラージがイエス・キリストに捧げる特別礼拝を執り行いました。次に、クリスマス・キャロルの歌詞カードが全員に配られ、レオナルド・アルバレスさんとブレンダンさんの先導で、シャンティ泉田さんのシンセサイザー伴奏に合わせて「もろびとこぞりて」を英語と日本語で斉唱しました。



続いて、『新約聖書』の「マタイによる福音書」から「山上の垂訓」をニュージーランド出身の英語教師ブレンダンさんが英語で読み上げました。日本

語は、キリスト教徒の石塚さんが昨年
に続いて今年も朗読しました。

再びレオナルドさんとブレンダンさんの先導で、「神の御子は今宵しも」を英語と日本語で斉唱しました。2人はさらにこの賛美歌をラテン語でも歌いました。

次に、マハーラージが簡単なスピーチを行いました。参加者に歓迎の言葉を述べ、クリスマスは世界中で祝われているもののその多くはパーティーや買い物などの「娯楽」になっており、霊的な意味合いがやや失われている点に触れました。「幸い、この日の真の意味について耳を傾けて厳かに深く考えようと教会に集まる敬虔なキリスト教徒の人たちもいます。イエスは人類のために愛の気持ちから自分の命を犠牲にしました。そして神への愛、同胞への愛を説きました。私たちも自分を犠牲にして他社に奉仕する必要があります」さらにマハーラージは、世界中のラーマクリシュナ・ミッションのセンターでクリスマス・イブを厳かに祝っていること、『ラーマクリシュナの福音』の中で師が「神の呼び名は様々であるけれど、神は唯一で同一の存在である」と述べていることを説明しました。「偉大な存在である神様は、お釈迦様として、イエス・キリストとして、そして近代ではシュリー・ラーマクリシュナとして姿を現されました」

またマハーラージは、この催しは逗子の小さな住宅地の小さな建物の中で行われているけれど「参加者はグローバル」で、インド、オーストラリア、ニュージーランド、ベネズエラから参加している人がいる（米国出身者も参加予定だったが病気で来られなかった）ことを説明しました。

そしてマハーラージは、この日の講話を行う、ベネズエラ出身のカトリック教徒で上智大学博士課程在籍中のレオナルド・アルバレスさんを紹介しました。レオナルドさんは「イエス・キリストとシュリー・ラーマクリシュナの類似点」をテーマに英語と日本語で話しました。（この講話はニュースレター2月号に掲載の予定）

講話の後、マハーラージはその内容に関連することとして、ギリシュ・チャンドラ・ゴージュがラーマクリシュナについて述べた言葉を紹介しました。ラーマクリシュナが現れたのはスワミージーやブラフマーナンダジーのような「純粋な魂を助けるためではなく、自分のような罪人を助けるためだ」と言ったそうです。「きっとマグダラのマリアも、イエスが現れたのはペテロやヨハネやマタイのような人々のためではなく、自分のためだ、と考えたのではないのでしょうか」

そして皆で数分間黙想し、クリスマ

ス・キャロル「きよしこの夜」を英語と日本語で歌い、プログラムが終了しました。



その後本館に移動して、クリスマスのプラサードの夕食をおいしくいただきました。この日の出席者は約40名でした。



山形サットサンガ

2017年12月8日（金）、マハーラージは山形市のひらつか保育園と千歳学童保育クラブを訪問し、園児に話しかけて祝福し、児童にインドの話をしました。翌9日（土）は、同市の遊学館にて一般の方たちを対象に午後1時15分から4時30分まで開催された講話会で「バクティ・ヨーガ」をテーマに講話を行いました。参加者は49名で、講

話の後には質疑応答と瞑想も行われました。



マハーラージは執着と愛の違い、神とは何か、物質と生物における意識の現れ方の違いについて説明しました。そして、バクティ・ヨーガの実践法として、瞑想、マントラ（真言）の称名、聖典の学習、神の道具として働くこと、すべてを神にお任せして結果もすべて神に捧げること、神としっかりとつながっていること、非利己的になることなどを挙げました。

主催者の人間向上研究所・高橋俊誠さんから、次の感想をいただきました。「バクティ・ヨーガは、神への愛、信仰の道として神と一つになる方法ですが、神に対する概念やいかに神を愛す

るかの『バクティ』について、難しかったとは思いますが、参考になったのではないのでしょうか。今回は一般の人がいつもより多く参加されて良かったと思います。そして、最後のオームを称名しながらの瞑想は、全員心のバイブレーションが一つとなり、とてもすばらしかったと思います。有難うございました」

仙台サットサンガ

2017年12月10日（日）、認定ヨーガ療法士会宮城が宮城県仙台市エルパーク仙台で開催したサットサンガで、マハーラージは「輪廻転生とカルマの法則」をテーマに講話を行いました。プログラムは午後1時に始まり、マントラの詠唱、講話、質疑応答の後、35分間にわたり瞑想も行い、午後4時30分に終了しました。参加者は約60名でした。以下は主催者のお一人である佐藤美弥子さんのレポートからの抜粋です。

一般的な生活の中では、良く生きるということについてニュースやテレビ、本等でも食事や健康などについてプログラムが沢山教えられている。反対に良く死ぬということについての教えはあまりない。死はどこか否定的・怖い等暗いイメージを持っている方も多いだろう。死ぬと全てがなくなる、という考えを持った方もいるだろう。

人生は誕生、成長、衰え、死の大きく

4つの段階があり、生れたからには死は誰でも避けることができない。それを考えると、良く生きることは良く死ぬことと同じである。良く死ぬためには知識・勇気・安心の3つを持って死と向き合う準備をする必要がある。

魂は皆に存在し、肉体のような有限で不自由な存在に対して、無限で永遠、そして実在・意識・至福（サット・チット・アーナンダ）を本性としている。生きている間自分について勉強する人は少ない。本当は自分の内側にどれほど素晴らしいものがあることか！ しかし、それを知らないために外側に沢山の楽しみを作り出したり、探したりしている。本来外の楽しみはあくまでも内側の反射にすぎない。

輪廻転生そのものはネガティブなものではなく、古い服を捨て新しい服を着るように、肉体も新しいものにしてまた解脱へ向けての勉強を始める、という肯定的なものである。何度も生まれ変わりながら識別して魂が綺麗になっていくと、少しずつ解脱に近づく。



南インド巡礼の旅報告（後半） （田辺美和子さんのレポートの要約）

8日目：9月20日（水）

ラーメーシュワラムの回廊寺院

デイ夫妻のシュラインにご挨拶後、出発の準備をする。マハーラージはその間、昨日訪問なさった小学校（ラーマクリシュナの名前を冠した小学校とのこと）での生徒たちとのやりとりを楽しそうに話してくれた。

次の目的地はスリランカに向かって細長く突き出た島、ラーメーシュワラムだ。本土からパンバン橋（Pamban Bridge）という名の約2キロの鉄橋を渡った先の、南インド東岸の都市である。ポンディチェリーから約7時間、バスは430キロを走破してパンバン橋を渡り、海沿いの州立ホテルへ到着。

この地では、たまたまチェンナイ・マトで一緒したスワーミーに大変お世話になった。にこにこして元気に話をなさる、気さくなスワーミー・プラナヴァナンダジーは、1964年、この付近に甚大な被害をもたらしたサイクロン災害のとき、ラーマクリシュナ・ミッションから派遣されて救援活動にやって来たのだという。その後、この地の復興と福祉のためミッションを辞してここに留まり、「ラーマクリシュナ・プラム（村）」というアシュラムをつくって奉仕活動を続けていらっしゃる。かつての貧しい村は今では多くの偉人を

輩出するように変容したという。ラーメッシュワラムの人びとは、このお坊さんの姿を見るととたんに笑顔になり気さくに挨拶をしている。プラナヴァナンダジーがいかにかこの地に自然に溶け込んだ奉仕をなさっているか、その証しと言えるだろう。

約束の時刻より早く来られたプラナヴァナンダジーは、その場にいた数名にラーメッシュワラムにまつわる話を短時間でたくさんしてくれた。タクルの父クディラムが当地への巡礼からの帰宅後、生まれた子供には「ラメッシュワル」と名付けたこと（『ラーマクリシュナの生涯 上巻』にその記述がある）、スワーミージーがカシミールから歩いて1892年にこの地に来たこと、ここで瞑想と乞食をして10日間を過ごしたこと、ホーリー・マザーもこの地に巡礼にいらっしゃり、アグニティールタム（沐浴場の名）とラーマナータスワミー寺院を参拝したこと。

18時過ぎ、プラナヴァナンダジーとともに、ホテルから数百メートル先の砂浜にあるアグニティールタム（Agnitheertham）へ出かける。次に私たちはラーメッシュワラムを聖地たらしめている寺院へ向かった。ラーマナータスワミー寺院（Ramanathaswamy Temple）はシヴァ神の寺院で、世界最長とされる全長1.2キロの回廊がある。1212本の彫刻された美しい石柱と、

1212の天井を持ち、すべて石造りで、石はヒマラヤから船で運ばれてきた。（協会発刊書『秘められたインド』の表紙写真の寺院。）昨日の訪問者は10万人で、入場には10時間かかったという。本来ヒンドゥ教徒以外の訪問者は回廊しか入れないが、私たちは翌朝、本殿他の参拝を許されることとなった。

次の朝、再びプラナヴァナンダジーとこの寺院を訪問した際の様子をこちらに書き添えておく。寺院中央の聖堂に祀られている二つのシヴァリングムについてマハーラージが説明なさった。このリングムの一つはシーターが作ったもので、寺院の本像である。かつてホーリー・マザーが巡礼にいらしたとき、そのリングムを見て突然こうおっしゃったという。「以前にも私はこの像を礼拝しました」その言葉によって、ホーリー・マザーはかつてシーターであったことが確認されたという。

神殿は本堂の他、様々な神殿があるようだった。パタンジャリが生きたままそこに入って扉を閉めたといわれるほらあなも、神殿の一つだ。ほらあなを右回りに1周した。寺院には他に、スワーミージーのシカゴ宗教会議でのスピーチの文言が刻まれた廊下もあった。

9日目：9月21日（木）

ダヌシュコティからマドゥライへ



朝食後ホテルをチェックアウト。いよいよダヌシュコティへ。そこはスリランカ（当時のランカ島）まで16キロほどの漁村で、かつてそこからハヌマーンが、ラーヴァナにさらわれたシーターを助けるため石の橋をかけた。近年、NASAの技術によって海底に本当に石橋があることが判明し、将来、インド政府とスリランカ政府が日本の技術援助によって橋を再建する予定だという。私たちは美しい砂浜を歩き、海の水を体に浴びた。魂というものの本質を垣間見させてくれるような、喜びに満ちた神聖な場所であった。



ダヌシュコティからマドゥライのラーマクリシュナ・マトに向かい、午後2

時、到着する。マドゥライは出発地のチェンナイから470キロほど南にあり、古代・中世はドラヴィダ文化の一大中心地だったのだそうだ。男性はマトに、女性は敷地奥の小学校（Ramakrishna Math Sarada Vidyalaya）のゲストハウスに宿泊する。建物の外壁には神々の大きな絵、教室にはマザーやスワージーの絵、廊下にはインドに自由をもたらすことに奔走したガンディーさんの絵、各教室には聖なる川の名前が冠されている。



15時半、ミーナクシー女神寺院（Meenakshi Amman Temple）へと向かう。高さ40～60メートルのゴープラムが12もあり、市内のどこからでも拝見できるという。マドゥライの、まさにシンボルがこの寺院なのだ。私たちは、異教徒は入ることができない寺院奥の神殿まで参拝できる、という恩恵をたまわった。



10日目：9月22日（金）

マドゥライ観光とショッピング

朝5時、マトの寺院でマンガラ・アラティとヴェーダのチャンティング。朝食後自由時間。小学校ではドゥルガー・プージャーを南インドスタイルで祝う「9デイズ」を開催しており、私たちは子供たちによるシュリー・クリシュナの劇を見たり、マドゥライの信者さんたちとマハーラージとの集会に参加したりとそれぞれの時間を過ごした。

昼食後、マトのスタッフにご案内していただき、ガンディー博物館とお土産の買い物に出かけた。夕拝のとき、日本語の歌と「ラーマクリシュナ・シャラナン」を捧げた。明日はいよいよカンニャクマリへ出発だ。

11日目：9月23日（土）

カンニャクマリへ

カンニャクマリは、アラビア海、インド洋、ベンガル湾という三つの海（海の色もそれぞれ異なる）が一つに交わ

る場所で、インドではそのような場所はとても神聖とされている。また、海から太陽が昇り、海へと沈んでいく沈むインド唯一の場所である。（ベンガル湾から昇り、アラビア海へ沈む。）そして、スワームージーが西洋への旅だちを決意した、記念すべき地でもある。宿泊先のホテルで昼食をすませた後、マハーラージの部屋で、この地にまつわる話を聞く。

タクールから「おまえは人びとの避難所になるべく働かなくてはならないのだよ」と使命を伝えられたスワームージーは、師の死後、「私はインドのために何ができるのだろうか」という思いを胸にインドを放浪し、やがてこの地、インドの最南端コモリン岬までやって来た。1892年のこと、今ではヴィヴェーカーナンダ・ロックと呼ばれ、かつてはカンニャクマリ女神が足跡を残したという聖なる岩で、スワームージーは「人びとの避難所」という師のメッセージを深く瞑想したのである。お金がなかったスワームージーは、サメが泳ぐ海を550ヤード（約500メートル）泳ぎきり、12月25日から3日間、瞑想に埋没した。そして母国の没落（貧困と無知と束縛）は、それまで言われていた「宗教のせい」などでは決してなく、「宗教を知らないからだ」という結論を得、アメリカへ渡ることを決意した。インドから霊的な知識を教えるかわりに、アメリカからはインドが学ぶ

べき技術、科学、そして喜捨を与えてもらおうと考えたのだ。この、「私たちも差し上げます。あなたからもいただきます」という考えはスワームージー独特なものである。マハーラージご自身はこの地に1972年来て、半年ほど滞在していたという。

12日目：9月24日（日） ヴィヴェーカーナンダ・ロックへ

朝7時、堂内をオイルランプで灯した石造りの小さな寺院、カンニャクマリ女神寺院（Kumari Amman Temple）へ参拝に行き、中でしばらく瞑想する。伝統を重んじるゆえか、男性は上半身裸でドーティを身に付け中に入った。寺院付近の店で朝食をいただいた後、ヴィヴェーカーナンダ・ロックへ出発した。



寺院のすぐ近くの栈橋から船に乗り5分弱で岩に着いた。初めに「カンニャクマリ女神の足跡」(Shripada)の神殿へ、次に神殿のすぐ隣にあるヴィヴェーカーナンダ・ロック記念堂（Vivekananda Rock Memorial）へ。



入堂する前に、この記念堂を建てることは簡単ではなかったという経緯をマハーラージが話してくださった。記念堂建設運動の中心団体「ヴィヴェーカーナンダ・ケンドラ」が、「ヴィヴェーカーナンダ・ロック・メモリアル・コミッティー」を作って州や国の政府、政党といった関係先すべてと交渉し、また、塩害や海の岩上に建設するにあたっての技術上の問題、この地域の一部のグループによる反対運動などのさまざまな障害を、スワームージーの「強くあれ！」という励ましの言葉を実践することで乗り越えていった。建設資金は、国のヒーローであるスワームージーのためにインド全土から寄付金が集まった。そして、現在ではヴィヴェーカーナンダ・ケンドラがヴィヴェーカーナンダ・ロックを守り、コモリン岬からロックまでの船舶事業や私たちが宿泊しているゲストハウスの経営の他、ヨーガやホリスティック・ヘルスの講習、インドのさまざまな地域で学校の経営を行っている。私は2009年、スワームージーのことを何も知らないままこのロックに来た。その後タクー

ルを知り、スワミージーを知り、一生のうちでもう一度来ることがあるだろうかと夢に見ていたが、今回ここにやって来られた、それもグルと共に。

13日目：9月25日（月）

トリヴァンドラムへ

この日、バスは最後の訪問地へ向かった。タミール・ナドゥ州を出てケララ州に入る。100キロを走って到着した先は西海岸の大都市、トリヴァンドラムである。街は近代的なビルや西洋風の建物で占められている。最後の宿泊先は、東京の近代的な高級ホテルのようなクールでハイセンスなインテリアのホテル。

午後、バックウォーター（水郷地帯）クルーズへ出かける。マハーラージの発案で、最近とみに有名な観光スポットなのだという。5人ずつ二つのボートに別れて双子舟のようにナイヤ川を進む。マングローブやヤシの木々の合間をぬって、水郷地帯の自然を体感した。

最終日：9月26日（火）

トリヴァンドラムからチェンナイへ

朝4時半にホテルを出発、朝・昼の食事と、1回か2回かのティータイム以外はずっとバスに揺られている。734キロの道を一人で走ったバスの運転手にも、そしてこのスケジュールにも驚嘆であ

る。夜9時、無事チェンナイ・マトに戻る。マトで食事。南インドでの、正真正銘の最後の夜。食後、今宵はマトに僧院長がいらっしゃるとのことで、面会の機会を作ってくださいました。ホテルでは、私たちがずっと「ディーディー（お姉さん）」と呼んできたデイ婦人が各部屋を訪れ、私たち一人一人にお別れの挨拶をしてくださいました。

**9月27日（水） チェンナイ空港から
コルカタのベルル・マトへ**

新しい体験が満載の、怒濤のような南インド巡礼の旅が終わった。今朝は時には厳しく、時には優しく私たちをリードし、家族のようにサポートしてくれたデイ夫妻との別れのときだ。チェンナイ空港の前でディーディーは、私たち一人、また一人と抱き合い言葉をかけ、皆は涙を流して再会を願った。長い道のりを安全に走ってくれたバスの運転手さんにも大きく手を振った。この巡礼の旅で、参加者それぞれが、それぞれの果実を手にし、また課題も手にしたことだろう。私たちが地道に歩を進めることと、神の加護を願う。タクール、マザー、スワミージーの見えざる助力と導きに感謝いたします。マハーラージ、そしてデイご夫妻の無償の奉仕に感謝いたします。巡礼の旅に参加した仲間たちの愛情と助け合いに感謝いたします。すべての人の平安を願って巡礼の旅のご報告をこれで終

わりにさせていただきます。



忘れられない物語

オンドリとキツネ

オンドリが高い木の枝にとまって声高く鳴いていました。森いっぱいに響き渡るような力強い鳴き声は、お腹を空かせて餌を探し歩いていたキツネの耳に届きました。

キツネはオンドリがとても高いところにいるのが見えると、自分に届くところまで何とかして降りて来させようと悪知恵を働かせました。

キツネはオンドリに向かって優しく話し始めました。「すみません、オンドリさん。新しく決まった世界共通の条約をご存知ですか。獣も鳥も、森の生き物全ての間で調和の宣言がなされたのです。私たちはもう互いを追い回したり乱暴したり食べたりせず、愛と調和に満ちて平和に暮らすことになったのです。どうぞ下に降りてきてくださ

い。この大切な件についてもっと話しましょう」

オンドリは、キツネが悪巧みに長けていることをよく知っていたので、遠くの方を見つめ、まるで何かが見えるかのようなふりをして黙っていました。

「何をそんなに見ているのですか」とキツネが尋ねました。

「動物の群れが見えるんですよ、キツネさん。イヌさんたちだ。私たちの方へ来るようです」

「えっ、では私はこれで失礼します」

オンドリが言いました。「キツネさん、どうぞ行かないでください。今から下に降りますから、イヌさんたちが来るのを一緒に待って、みんなでこの新たな平和の時代について語り合しましょう」

「いえいえ、私は失礼しますよ。イヌさんたちはこの平和条約についてまだ何も聞いていないかもしれませんから」

…友情を盾に急に近づいて来る人には
要注意

(『イソップ物語』より)

今月の思想

「引き返して始まりを変えることはでき
ないが
今いるところから始めて、終わりを
変えることはできる」
…C・S・ルイス

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: info@vedanta.jp